
山波会議

山波太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山波会議

【Nコード】

N5814P

【作者名】

山波太郎

【あらすじ】

夜眠れないとき、向き合う現実があるとき、いろいろ塞ぎこんでいるとき、思考回路に火がついてどこか遠くへ行っちゃおうと思うんです。やめたくてもとまらないことってあると思うんです。それを自己満足に書いていくエッセイだと思ってください。

自己紹介

エッセイを書くこうと思う。いや、書くこうと思ったから、今こうして書いている。

とりたてて特別な感情があるわけでもなく、大した意味もこれと違ってない。

ただ僕は根拠のない考え事をよくするから、それをだらだらと文章に起こすのも面白いかもしれないと思った、というそれだけだ。ようは面白そうだから書くのである。

面白ければなんだってアリだ。そういう主義でいこうと思う。そんなだから、一貫して何かを主張することはない……と思う、たぶん。こういうのは未来のことだから、予測がつかないし、意識することでもルールを作って、それにガンジガラメになるのは面白くないでも、だからこそ、矛盾は大いにあると思う。いや思われる。もともと、その時に思っていることを書くのだから、それはきつと仕方のないことなのだ。ないほうがおかし。

人間というのは人格ひとつであるものではない、という言葉は、多かれ少なかれ誰もが耳にしたことがあるだろう。もしも「人格」という言葉にひっかかりがあるのなら、「思考」や「感情」という言葉に置き換えてもいい。いつも同じことを考えている人はいないだろうし、またいつも同じ気分で過ごす人もいないだろう。(ひよつとしたらいるのかもしれないが、僕はそんな人を知らないからいないことにする。)人はみな、思っていることは刻々と変化するものなのだ。

小学校、中学校、高校と様々な人から教育を受けてきたが、教育者はみな矛盾というものをそれぞれ抱えていた。簡単に言うなら、「前と言っていること違うじゃないか」と、そういうことである。極端な話では、数分前に言っていたことと違うことを言う人がいて、大きく混乱することもあった。そんなとき僕は、DNAと外見と記

憶と歴史が全く同じの全くの別人が喋っているのだ、と思いながら理不尽さを耐えた。「人間とは人格ひとつであるものではない」とはそういうことなのだと思う。

だから、このエッセイの題に会議とつけた。あるひとつの事柄を多方面から考察するのではなく、もっと長い目をもって自分というものを議論しようというのである。

何を言っているのかよくわからないという人は、こんなことを考えている人もいるんだな、くらいに思ってくれればいい。エッセイというのはそういうものだと思うし、そんな程度のものだと思う。僕としても自分の考えを知ってほしいから書いている。もし読んでもくれるのなら、それはとてもうれしいことなのだ。

つまり、そういうことである。

ところでエッセイというのは誰が書いているのかということが、大変重要になるのだと思う。だから最後に、簡単に自己紹介をしてこの項を閉じようと思う。

ペンネームは山波太郎、生年は一九八九年。夏生まれ。十二月十九日現在、三回生、二十一歳。専攻している学科は医療科学部診療放射線科。診療放射線技師となって病院勤めすることが当面のノルマ。

エッセイを書こうと僕は思う。

異世界に行きたい

月が二つ三つあるような世界に行ってみよう。

木星に行け、なんていう話になるかもしれない。が、せめて生きていけるだけの酸素がほしい。あと食糧もほしかったりするけれど、それは贅沢な要求だろうか。とにかく僕はどこか違う世界に行ってみよう。地球上の異文化な世界では意味がない。異世界というところに意味がある。たとえば、こことは異なったその世界の住人が魔法を使っていたりすると、ものすごくよい。ぐつと異世界味が増すから、行けるといいうなら、そういう世界に行きたい。べつに帰ってこれなくても、それはそれでいい気がする。それほど理不尽さも、渡航には必要だろうと思う。

だれか僕を召喚してくれないだろうか。

どうしてこのようなことを思うようになったかは置いておくとして、もう八年くらいは、そんな風に思っている。もちろんその強さには時期によって波があるから、実質時間はもつともつと短くなるだろう。それでも最初にそう思ってから、それだけの時間がたった。そんな今でも、こうして思っているわけである。

それなのに、それなのに、行けた試しがない。八年、思い続ける破目になったのは、簡単に言えば行けていないからである。ワープするその兆候もない。なんとなく、「今日は行ける気がする！」なんて思い、「目覚めるとそこは知らない世界」な展開を期待して布団にもぐっても、変わっているのは時計の針の位置と、天気ぐらいだ。誠に残念、極まりない。朝目が覚めて、一番初めにすることが落胆。せめてカーテンは開けようよ。

どうしてこれほど思っている、異世界というものに行けないのか。ワープしないのか。世界の怪奇事件を調べると、「目の前の人が消える」ということが多くある。そりゃ、多いと言っても、ご町

内の奥様方が立ち話で「ちよつと奥さん、今度は誰々が消えたんですってよ?」「あら昨日お話いたしましたのに。怖いわねえ、明日は我が身ですわよ」「いやだわ、おほほほほ」なんてネタにされるような頻度ではもちろんない。……それほどだったら、この世界はとつくに異世界でいい。僕はこんな思いすら巡らせない。さつさと僕を消して、噂の種になつてしまいたい。とにかく、頻度でいえば、歴史的にみれば珍しい回数ではないということだ。

すこし話がそれたが、要はどうして僕は消えず、異世界にワープしないのか、ということであり、そしてそれを考えた。

考えた結果はありきたりな説に行きついた。パラレルワールドである。説明不要なほどに有名だが、それゆえにその定義に相違があつてはいけないので、簡単に説明することにする。まずはじめに、ここでいうパラレルワールドとは「もしも世界」のことではない。確率の話だ。

まずサイコロをイメージする。そして振つてみる。出た目は何か一だった。なぜ一が出たのか 一が出る世界に来たからだ。

サイコロを振るという作業を行った後、世界は六つに大別されて広がる。なぜ六つなのかは、言わなくてもわかるだろう。一の目が出たすぐ横の世界では、二の目や三の目が出ていて、それを見ている僕がいる。それがパラレルワールドだ。九死に一生を得た生還というのは、すぐ横のたくさんの世界でその人が少なくとも九人は死んでいるわけで、降水確率二十パーセントだからと言つて傘を持たずに外出すれば、五分の一で雨に濡れる世界に到達する自分が確かに存在することになる。ヒーローが必ず勝つのは、その世界に僕たちが来たからだ。

僕が異世界に行けないのは、たくさんあるパラレルワールドで、異世界に行くことのない世界に僕が来たからだ。迷い込んだと言つたほうがいいかもしれない。そしてここからが大事で、こうして確率的に世界が分岐する以上、異世界に行くことがない自分が生まれる。生まれ続ける。確率はどれくらいで広がっていくのだろうか。

数字が大きくなればなるほど理不尽さは増していく。いやになる。

八年間。僕はいつたい何人、異世界に旅立ったのだろうか。その世界は楽しいだろうか。

もし僕が旅立った先の異世界をのぞける窓があって、そこからそこにいる僕をのぞけたら……なんて思う。

そのときに備えて、投げ縄術でも練習しようかと考える。

千円札

実家には自分が小学校から使っている学習机がある。もうかれこれ十五年以上僕の部屋にあり続けることになる。『大きな古時計』のように生涯の友になるかといえ、そうでもない。この机で勉強をしたという記憶があまりにも少ないのだ。よって思い出深いツールとは言えそうもない。

そんな机、それでも年季だけはあるから物は堆積していく一方である。元来不精も手伝って、その机、引き出し内は無法地帯と化している。付属の本棚を軽く見てみても、カオスと言えるかもしれない。カバーがよれよれになった『ハチ公物語』のすぐ近くには『ナイトアンドベイビー』というプレーステーションソフトの説明書がかかっているし、さらにその横には数枚しか挿んでいないルーブリーフのバインダーがある。その反対の本棚には『るるろくに剣心』の第九巻だけ、一九七〇年代フォーク全曲集、中学の卒業文集、進研ゼミの付録おもちゃエトセトラエトセトラ。本棚の上には読んだこともない新約聖書や国家試験関係の参考書、そしてすてきな恋が実る飴があつて、それには見るたびにイラつとさせられる。引き出しを開けると返し忘れた小学校図書が出てきた。もう整理する気力もわかない。机の上にある空き缶には『磁石にくつつく物特集』と書いてある。訳がわからない。

それでも何か使えるものが見つかるだろうと思つて引き出しを開けて回ると、千円札が出てきた。この年で千円札一枚財布に増えたところで大した誤算にはならないが、それでも文庫本一冊買えて、少なからずお釣りがくる。ラッキイと思ひ財布に入れようと手に取ると、絵柄が夏目漱石だった。千円札が野口英世になったのは二〇〇四年からだったから、もう五、六年ほど見ていないことになる。なぜここに？　なんて思つたけれど、当時僕は中学生真っ只中ということで、悪知恵というものを働かせたようだ。大方、プレミアが

ついて価値が上がると予想したのだろう。千円札程度、プレミアがついたところで大した額になることはないだろうに。悪にもならない知恵、思考である。馬鹿か阿呆でしかない。

本当にしようがない奴だなあ、と思いながらもその札を財布に入れたりほしないでおくことにした。別にプレミアがつくとか、そういうことはどうでもいいのだけれど、なんとなく大切にしまっておこうと思ったのだ。そこに意味を見つけることは難しい。せいぜいまた忘れたころ　金欠のときが望ましい　に見つけて、悶々とすればいいと思う。もしもそのとき、どれほど悶々としたとしても、結果として使ってしまうようであれば、よくも悪くも自分という人間が変わってしまったということだろう。

もとあった場所に戻すとき、その千円札の下に隠れていたものが目にとまった。ケツメイシの『トモダチ』だった。

ルサンチマン

高校時代は走ってばかりいた。陸上部でした、と断りを入れればそれが比喩でないことがわかるだろうか。

虚しい自慢になるが、それなりに名門で全国でもそこそこ名の知れた高校だったと認識している。名門と言うからには勝利には貪欲で、とにかく和気あいあいとじゃれ合うような雰囲気ではなかった。その顧問であり、そして指導者でもあった人が口にした言葉で、今でも呪いのようにまとわりついているものがある。その人はジュニア世界陸上の総監督をしたこともあったりと、やはり名将にカテゴライズされるような人なわけで、そんな人が発した言葉なわけだから、その言葉は真実に近いものがあるのだと思う。少なくとも美化され、量産された言葉なんかよりはずっと。

その言葉はこうである。

「陸上競技とは、ウサギが努力する競技なんですよ」

僕は今でもその言葉を言ったときのあの人の表情を忘れない。目線の先は過去の思い出だったのだろう。どのときよりもその目は優しかった。

だからこそ残酷に感じた。

日本の文化よろしく、ドラゴンボールで表すとこういう解釈になるだろうか。「サイヤ人が努力して初めて地球は守られる」。

そのときその場にいた何人が自分をしてウサギだと評価しただろうか。名門と言ったって競技者のレベルはそれぞれがそれぞれで、全国リスト一位なんかもいれば県レベルでも活躍できない人もいる。謙遜の概念を除き、一体何人が自身をウサギだと信じ切れただろうか。

少なくとも僕には無理だった。県レベルだって一位になれない僕には無理だった。

だから僕はどこまでもカメだったのだろう。ウサギだと言い張れ

ばよかったのだ。自分を犬だと思い込む鴨だっているというのに。そうやって言い張れることができたなら、弾むくらいはできただろう。

そうすれば、全国で活躍できるレベルくらいにはなれたのではないだろうか。今思えばそう感じる。あるいは、『彼ら』はそんな話を毛ほども聞いていなかったかもしれないけれど。

僕個人では県よりひとつ上が精々だった。

努力するからには、ウサギでないと意味がない。カメでは意味がないのだ。やはりそうなのだと思う。

今でもときどき、当時の映像そのまままでよみがえる。そして僕が問うのだ。お前はウサギかと。

だから……僕は遊ぶことにした。遊ぶからにはカメもウサギも関係がない。その考えは間違いなのかもしれないけれど。少なくともウサギに食われる心配はない。

僕は今でも走っている。比喻ではない。

馬鹿という言葉

『馬鹿と言った方が馬鹿』という言葉があるが、はたして馬鹿と呼ばれた方はどうなのだろう。心の中でほくそ笑んでいるのだろうか。

その言葉は、小学生の特に低学年がよく使うであろうテンプレ的な常套句である。馬鹿と侮辱された場合、個人によってはほぼ百パーセントの割合で使われる。その際、語尾を不自然に伸ばしたりなど、憎たらしさを演出することも多い。もし過去の自分にそのようなされたら、頬にビンタでもかますだろう。

それはそうとこの言葉、実際にそのシチュエーションを想像するとかなり滑稽である。馬鹿と言った方が馬鹿だからだ。仕事に置き換えると、上司がある部下を使えないと貶している。しかしその貶している上司の方がよっぽど使えない。そんなシチュエーションだ。笑えるというよりむしろハツとさせられるような言葉である。その上司はあとでボロクソに陰口を言われるに違いない。『お前の方が馬鹿だ』と。

こうならないためには、どちらがはたして馬鹿なのか、ということとを常に考察していかななくてはならない。軽はずみに物事を決めつけてはいけないということだ。いつか足元をすくわれる。飼っている方が飼われている、なんてことになりかねない。

では、馬鹿と言われた方はどうなのか。それは言った方と同じく馬鹿に違いない。

先ほどの例に則ると、上司の方は部下部下のポテンシャルを上手く引き出せていない、つまり上手に使えていないという点で馬鹿である。

しかし部下の方、使えないと言われるということは、それなりの道理があるということだ。仮に、非の打ちどころがないほどに優秀ならば、馬鹿という概念の付けられる隙などあるはずがないのである。

馬鹿という貶し言葉は、双方にその素質があつて、初めて口にされる言葉ということになる。

馬鹿になりたくないというのなら、軽はずみにこの言葉を口にすることはいけないのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5814p/>

山波会議

2011年2月28日21時26分発行